



## 今やろうと思っていたのに …

成岡 市<sup>1</sup>

### 1. 「巻頭言」は旗振り

ここ十数年ほどの間に書かれた本誌「巻頭言」を振り返ってみると、たとえば「研究の成果を社会に還元する視点が弱い」(丸山利輔, 2022), 「基礎的な研究分野の科学者が考える『科学』というものには、さらに普遍性や再現性に厳しい基準があるようだ」(吉田修一郎, 2019), 「『たこつぼ』の中の精緻化をあわせて、『たこつぼ』が意味を持つ『文脈』の構成も同時に扱われたいけない」(澁澤 栄, 2006), 「『研究の着想や発想』の楽しみはいつまでも持ち続けたい。(中略) 土壌物理学の得意とする技に『測定』がある。(中略) 綺麗な結果には科学の蘊奥があると主張する向きもあるが、綺麗でない方に目がいてもよいではないか。そこに新しい何かがあると思えばこそ、である」(成岡 市, 2006) などに目がとまる(我田引水あるのはご容赦ください)。

このような「巻頭言」は、本誌を上げたり下げたり、押ししたり引いたりしながら、若手研究者や初学者の背中を押し、価値観と意識を高揚させる旗振りということができるかもしれない。

### 2. 何気ない日常交流

一部屋4人制の学生寮にいたことがある。そこは「自啓寮」(じけいりょう)といい、宮沢賢治がかつて寮生として過ごしたことが現代を生きる者にとって誇らしい。学校の創立時は盛岡高等農林学校、今は岩手大学農学部と呼ばれ、2022年7月1日に高等農林創立120周年記念式典が行われた。

プライバシーを論ずるよりも、寮内を飛び交う情報が多種多彩で、伝達速度が大きいメリットの方が秀でている。試験問題の傾向と対策はもちろんのこと、指導教官や研究室に関する情報は学生にとって貴重で、研究室選択、卒論テーマ設定、卒業後の進路検討などに関して頼りになった覚えがある。寮外生達がそれらを仕入れに訪れて来たものである。現在の一部屋1人制の学生寮とは隔世の時代だった。

また、獣医学を専攻する学生達との何気ない日常交流もあった。私には別世界の話題が並び、生命の不思議、家畜(産業動物)診療の秘訣、コンパニオン・アニマル(伴侶動物)の将来像などは、元気な獣医学生の人柄も重なって、私のその後につながる大きな刺激となった。

加えて記憶に残った話題がもう一つある。宮沢賢治も学んだとされる土壌学研究室の学生で、山登りが三度の飯よりも好きな東京生まれのタフガイ。私と数歳若い彼と明け方まで語り合った中で、冬山の頂上近くで遭難者が発生した時の話題がある。救助隊は二次災害に十分注意を払いながら、深い積雪をラッセルして現場まで最短距離を登っていたという。一列縦隊の先頭は、数分のうちに汗が滴り落ち、息も絶え絶えになる。二番手は先頭の背中を引っ張り、最後尾に送り、隊の進行を続ける。最後尾につくと呼吸を整え次に備えることができる。隊が現場に到着するまでそれが繰り返される。この様子を見て、タフガイの彼は「研究分野の世界でも同じようなことがあるのではないかと」思ったようだった。つまり「(救助隊の)目的、使命、姿勢、先頭者の役割とそれに続く二番手、三番手…」の話題は、「豊富な物量・資金、優れた分析機器、優秀な研究グループ、研究課題の理解者(支援者)が揃っていたとしても、十分満足な研究成果を生み出すことが可能かどうか?」ということになる。いきなり精神論のようで恐縮だが、かなりの含蓄があった。

### 3. 研究者は皆同じ、一緒だよ

故岩田進午さんは、かつて「研究者同士には、国籍の違い、性差、年齢差、地位の差などはないと思う。お互い『〇〇さん』と呼び合うことも必要だね。僕は向こうで Shingo と呼び捨てだよ」と岩田流研究者像を説いてくれた。ケースバイケースはあると思うが、私はできる限りそれに近い価値観を持ち続けていたい。

北海道大学土壌学の波多野隆介さんが、当時の文部省在外研究員としてオランダのワーゲニンゲンに滞在中の出来事がある(ご本人からお許しをいただいているので実名で紹介)。私は、たまたま「土壌構造/土壌生物相の相互関係に関する研究方法」(1991)の研究会出席のために初めての欧州旅行地となるワーゲニンゲンにいた。そこで、波多野さんの受け入れ担当だったボウマ(Johan Bouma; Wageningen University)に会うことができた。当時名実ともに全盛期を迎えていた世界的土壌学者「J. ボウマ」である。岩田さんが彼を筑波の農工研へ招聘した時に初めての挨拶を

<sup>1</sup> (株)三祐コンサルタンツ

して以来の再会である。ワーゲニンゲンでは、研究会だけでなくエクスカージョンも行われた。その間、欧州各国の研究者が多忙なボウマさんに対してニコニコしながら「先日はどうもありがとう！」と親しい隣人同士の挨拶のような様子があった。交わされる言葉には「時間と距離」のいずれも短い。ボウマさんは、波多野一家がワーゲニンゲンに落ち着いてから帰国するまで、引越し荷物の搬送も含めて、カウンターパート役の一切合切を引き受けていたようである。このボウマさんの人柄と行動力に素直な感動を覚えたのだが、驚きの中には地球の裏側からはるばる出かけて行った者が感じる羨望が加わっていたかもしれない。これは 30 年ほど前の出来事だったが、最近の論文 (Rattan Lal ほか, 2021) では、ボウマさんや波多野さんを含む 21 名の著者の中に日本人研究者が連名参加となっていることから、オランダでのあの出来事は隔世のことだったのだろう。

#### 4. 今やろうと思っていたのに …

土壌物理学学会編集委員会が「土壌の物理性」創刊 150 号 (2022) に大変興味深い企画を掲載している。

宮本輝仁編集委員長は 3 つの目玉企画があると説明していて、とくに「みんなのミニレビュー」(著者 72 名) は面白い。届けられた冊子は厚く・重くなっているので、印刷・郵送経費が学会予算を圧迫するのではないかと少々心配をしたが、全国気鋭の土壌物理学研究者がどのような方向をみているのかを俯瞰することができる。72 名の中には、自らの研究の最終点が見えてきたようだと言白する一流研究者、学位請求論文の延長線上を走り続ける粘り強い研究者、新しい課題に果敢に取り組む研究者 … が名を連ねている。

私自身が生涯の課題と信じている (?) 土壌構造研究は、上述の 2 番手の分類にあたるだろう。あるとき米国の研究者から「この研究は何年掛かっていますか？」と尋ねられたことがある。「ほぼ十年かかっています」と応えたところ、「我が国では、必要な研究費の獲得努力をして、研究グループを組織できれば、数年で結論を出しますよ」と助言されたことがあった。しかしながらこれは、研究着手から今日まで通算 40 年も掛かっている筋金入りの「亀速」となってしまった。

今やろうと思っていたのに …, の心境を突破できるのはいつのことになるのだろうか。

## 引用文献

土壌物理学学会編集委員会編 (2022): みんなのミニレビュー, 土壌の物理性, 150: 23–83.

丸山利輔 (2022): 土壌物理学学会の今後の発展に向けて, 土壌の物理性, 150: 1–2.

Narioka, H. (1991): Microcirculation network by tubular-pore in soils, Abstract of International Workshop on “Method of Research on Soil Structure/Soil Biota Interrelationships”, International Agricultural Center, Wageningen, The Netherlands.

成岡 市 (2006): (日本の) 土壌物理学は、「未完成」であるがゆえに …, 土壌の物理性, 103: 1–2.

Rattan Lal ほか 20 名 (2021): Soils and sustainable development goals of the United Nations: An International Union of Soil Sciences perspective, *Geoderma Regional*, 25: e00398, Elsevier.

濫澤 栄 (2006): 「ばらつき」の科学と技術, 土壌の物理性, 104: 1–3.

吉田修一郎 (2019): 良い土の科学, 土壌の物理性, 141: 1–2.